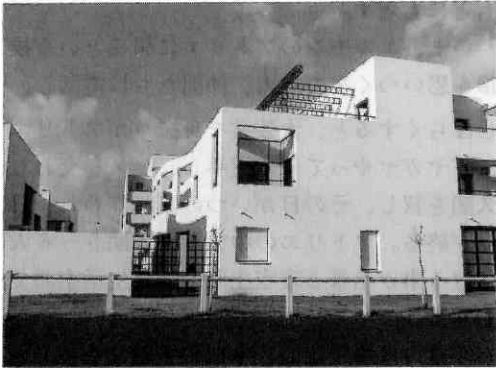


# 絵の虫 “蔵書票によせて”

文芸学部芸術学科 助教授 野口明美



アトリエ全景

1989年7月9日早朝、ほぼ定刻にパリ北郊ロワシーにあるシャルル・ド・ゴール空港に機は到着した。ルハとSが笑顔で迎えてくれた。三人で濃いドゥミタスのエクスプレスカフェを空港内のカフェで飲むと大阪から抱えてきたいくたの課題もそして疲労も霧散霧消してしまった。初夏の頃とはいえ昼と夜の温度差の激しい地では霧雨の早朝に飛行場まで迎えに来てもらえる嬉しさが身体のすべての血の流れを入れ換えてくれた。

転々としたけれど16年の間スペインを皮切りにユーゴスラビアのマセドニア地方にあるブリレップ（丁度オフリッド大湖に接してギリシャとアルバニアが重なっているあたり）を経て結局好むと好まざるに関らずといえよよいものか欧州の吹きだまりパリに住みつくる事になり、その間二人の子を得、妻もろとも絵という虫につかれた男の行動律にふりまわされながら四ツが巴にやってきた。いわせてもらえれば限り無く貧しくそして自由であった。実は春二人が一応の式を挙げ6日後に大阪の茨木を発つ日、私の黙父が「夏には帰ってくるねんな」の一言への返事が結果として10と

数年が経ち、親不幸にもその父の死に顔にも接する事も出来ず永の別れとなってしまった。その一点だけを想い浮かべても16年という年月は永い。

思いつくまま書こうともがいているわけだが、なるほど文をつづることはつらい、なぜといえば、一本の線として人生などある訳がなく、都度シャボン玉の様に浮かんで消える想念をピックアップするのだけれど、やはりそれは又それへの道と訓練がいる、ぎくしゃくする心を把える程難かしいものはない。一体何をいわんとしているのか……。

早朝の霧雨はすでに上がり、地と草に充分湿気を含んだ我がアトリエの庭に足を踏み入れた時、なぜか身体が一回ふるえた。それは、冷気のためか。

このアトリエは、フランスの公共のメゾン・デ・アーティストという機関が、アーティストに貸し与える、いわば公立のアトリエといったものだ。当然こんなシステムは日本という国に出来るはずはないし、そんな構想すらない。天井は5mはあろうか、吹き抜けで中二階がある。建面積が70㎡前後でポルトの前に庭が植垣で区切ってある。いつかの冬に植えたチューリップが主人のいない間に勝手に咲き勝手に散っていて、赤かったであろう花びらの数枚が頭のない茎だけが地からのびた真下にヨレヨレに土色にしおれた葉と重なってちらばっている。日本人はどこの国にも負けない素質と技を持ち合わせていると思う。極論を吐けば列島そのものが一つの完全芸術だと思ふ。本来実に風通しのよい、“限り無く透明に近いブルー”とはよくいったもので、三ヶ月ごとに必ずやって来る四季の完璧さは、

明と暗といった二元的、つまり<sup>あいだ</sup>間のものが欠除していると思える程、夏と冬しか感じられない季節感の地とはおのずと違っている。しかしこれとて「八代亜紀」のカセットをエレモンにある我がアトリエ内で何回も何回も聞いて感じ入っているのと、日本で聞いて妙な生々しさを感じ、つい、いやになってしまう事と、つまり列島そのものを芸術だと思ふ心は列島を離れて思う心に根ざしている。列島その物の中において列島を思う事は自分にとって難しいという事だ。

この稿の中心は何なんだと思ひ、話をもともどすが、中心が何かは解らないまま進める。



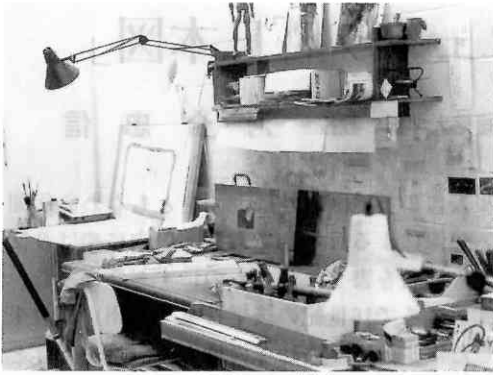
仕事中の筆者

シャルル・ド・ゴール空港からルハの車で地理的にいえば真左に、パリにもどる距離と同じくらいの所にあるエルモンのアトリエに帰りつくのに便利な道はなく、一旦パリ市の外廓線の地点まで南下し、V字型に上に向けてエルモンへと向う。カフェで長居をしたためか、すでにアトリエにたどりついた時は午前10時頃になっていた。気分はすでに16年間住み慣れた延長上にあつた。室内にはまだ二人の娘の痕跡やら妻が使用していた物などがアチコちに散在している。前の庭でキャーキャー小さな娘二人がステファニー、ドロテ、ビビアンヌ、ジュリアナ、ディアナ、ケンタ、ジュピター等々の面々と遊んでおった光景が眼前数メートルのところで展開し、勢いよくポルトを開けボタンと閉める音が耳奥にそのまま残っている。これらの姿や心象に触れる

といささか感傷的になってしまう。なぜこの世界をかなぐりすて日本に帰ったのかと、ふと心が逆もどりするのを、一種のエレジーを聞く思いの様に本当は半分はここちよいのだが。フランス語でギッシリ書かれた娘のノートに目が行くと、今はそのノートに漢字を書き込んでフーフー言っている姿とダブるし、これでいいんだと、無理に心の引き出しをグイともともどす。

いま、エルモンのアトリエに居るといふ挨拶を思いつくまま友人、仲間たちに電話し、しばらくすると、大袈裟な身振りがアトリエにガヤガヤやって来て握手し、ピズを交わし、久闊を叙し、その日がいづの間にか暮れ一日目が終る。アトリエの中二階が人間5~6人は寝る事が出来る寝室空間であり生活空間でもある。

今夏の仕事予定は、本稿の主題になっている近畿大学中央図書館の稀観書蔵書票の制作依頼が一つと、フランス大手自動車企業シトロエン社からの新車発表に伴う企画作品制作展示の依頼と、加えるに東京のTBSテレビからのパリ200年祭にからみ、拙作のバステュー・メトロ作品への取材と、アンテルビューがそれぞれ重なりつらなっていた。まずエルモンに到着したその日の午後、Y氏より連絡が入り、翌日正午ボージュ広場でのランデブーを約し、早々仕事が初まった。翌日のその時間にその場所には、すでにTBSのA氏とN女史が待っておられ、少しすると小柄でかわいい感じの女性が現われ、TBSの三雲たか江キャスターである事を知らされた。すぐ近くのバステュー広場に行く間、色々と三雲キャスターと話し、打ち合せをまじえて雑談しながら目的地に到着し、広場に面した一角のキャフェで取材する事となった。2~3時間はフィルムは廻っていたであろうか、取材が終ると、自分はヨレヨレに疲れ果ててしまった。結果としてこの時のフィルムは日本時7月14日の6時半からのニュース番組に流れる予定であったのだが、三原山か何かの噴火の為ニュースがそちらに先行し没と



アトリエの内部

なった。後日TBSの天野氏がすまなさそうにその事へのわびと、アトリエでの制作風景取材への依頼を受けた。去年の晩秋に東京のギャラリー・ユマニテでの個展の折もNHKの取材のはずが丁度昭和天皇が倒れた時と重なり、これも没となっている。いつであったか、京都での時は、平安画廊で待っている時に、古都税の問題で取材班がそちらにまわり、これもはずされた。考え方によれば、本当は、作家など前面に出る事はやめた方がよいという教訓を与えられたのかもしれない。海音寺潮五郎が、“日本の名工”という著作で、日本に現存する本当の名品にはその作者の銘すらない、作品というものは作家の手から離れ一人歩きする。誰が作ったかという事は本来作品とは無関係であるという。それが本当の作家冥利というものだとも言われる。こんな風な事を読んだ記憶がある。作品というものは、作家が彼自身の作品に関っている限り本当の姿がないのかもしれない。ひるがえって遠くを見つめるとすれば、アルタミラ壁画を一体誰が作ったのかの詮索は無に等しいといえる。ちっとも大袈裟な事を言うつもりはないが、自分自身作家稼業を業としているものとしてしょっちゅうやってくる難題に出合った時の回帰がいつもここにいたる事で少しの平衡を保っている事を思えばだが。

又しても話しがそれようとするが、前記取材の事と同時進行形で蔵書票を制作した。無茶を言えばマリアヌヌ（自由の象徴女神）はTBSの三雲キャスターが念頭に浮んだ、それ

に少し不透明な部分が重った。三つの雲はそれへのシャレのつもりであり、エクスリブリスのヒポポタムスは近畿大学というより大学というイメージがそれにいつしか重った。シルエットのカーブは生駒連峰を意識して作った。その時その時現われようとするものを時間という制約にはめこんで一気に制作し、刷り切った。蔵書票という事で、紙は和紙を選びざるを得なかった。結果として大学の蔵書展にギリギリ間に合う配慮を、図書館の永井女史よりうけて間に合った様なものだ。お礼を申しのべたい。それに当初この制作依頼を持って来て下さった建築学科の楠田先生には遅れに遅れる制作態度にその都度、風を吹き入れて下さる助言をいただき、なんとかこぎつける事が出来た。お礼申し上げる次第です。

今はその作品の銅版も図書館にあり、限定200部は、それぞれの本の間にはさまれておる事を思えば、本望と感じている。

後の事になるが、シトロエン社との仕事は、ビデオ制作もしてくれて、パリより送られてきた。感激であった。

三つの仕事を抱え、エルモンを去り、機に乗るといつの間にか眠ってしまった。覚めると、アンカレッジの山の雪が美しかった。

(造形美術専攻 絵画)